KANAZAWA UNIVERSITY HOSPITAL

Kindai Hospital Today vol.16

金沢大学病院ニュース

平成25年10月発行／vol.16　金沢大学附属病院　〒920-8641 金沢市宝町13-1　TEL.076-265-2000

病院長　ご挨拶

病院長　富田　勝郎

昨年は金沢大学附属病院が創基150年を迎えた記念すべき年でした。今年はこの歴史を継承して新しい第一歩を歩み始めたことを嬉しく思います。

今春のホットニュースとして「金大病院CPDセンター」の完成が挙げられます。これは、医師・看護師不足に凝集される地域医療問題を改善する根本対策として設営されたもので、どこにいる医療人であってもCPDセンターに来て自己啓発に参加できるよう、国・県の地域医療再生計画資金で金大病院内に設置してもらったものです。

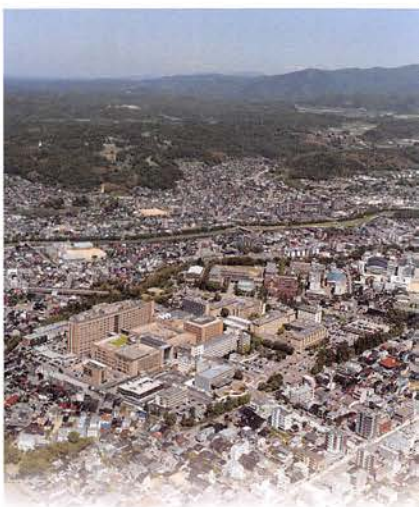
宝ホールに隣接するこのCPDセンターでは、講演・研修・技術実地修練などを通じた最新医療情報提供の場となり、且つ医療関係者同士の知的交流の場となっていくことを期待しています。CPDセンターをバネに金大病院は、石川県はもちろんのこと北陸圏の医療を牽引し、一層逞しく発展していくことでしょう。

一方で旧い大学病院の撤去作業は最終段階に入り、残る正面部建物も撤去され、大学病院に新正面玄関から直接入ってこられるようになりました。これまで患者さんが旧正面から曲がりくねった長い通路の末、ようやく新正面に辿り着いていたイライラ感も消し飛んだはずで、ホッとし、病院内に新鮮な胎動を感じています。

新鮮なことといえば、病院プロムナードホールの正面に輝いていた「青空と虹とヒコーキ雲」スクリーンも新鮮になりました。もとの絵図はホール完成当時から「夢を叶えてくれそう！」と大変親しまれてきましたが、年月と共に剥がれが目立ってきました。そこで前絵のイメージを踏襲しながら更にオルゴールハート時計の詩曲とも関連するような風景を依頼したところ、「青い海・草原・お花畑・大樹・真っすぐな道・降り注ぐ日光とそよ風」を加えて、デザイナーの死力を振り絞っての見事な絵図が完成しました。

このスクリーンをオルゴールメロディーを口ずさみながら眺めていると、誰でも自ずと懐かしく優しい気持ちになりますが、患者さんにとっても一層苦痛が和らぎ癒されるような気持ちになっていただけるのではないかと思われます。

もうひとつ新鮮なこと。外来棟と病棟をつなぐ渡り廊下に囲まれたコンクリートの採光空間はカビや苔が広がり汚れが目立っていました。そこで金沢美術大学・ホスピタル・アートの先生・生徒方に依頼し「宝の島」を創出してもらいました（「命の象徴 “まが玉”」＋「健康は宝」⇒「まが玉の形の宝の島を目指して健康を取り戻そう！」）。これも病室・外来を行き交う方々にとっての癒し空間になればと願っております。



大小、着々と改善が進められている金沢大学病院ですが、思いやり・慈しみの心に始まる“医は仁術”の精神に全く揺るぎはありません。これを胸に、患者さんの「最高最善の医療を受けたい」という願いが叶いますよう、努力し続けていきましょう。

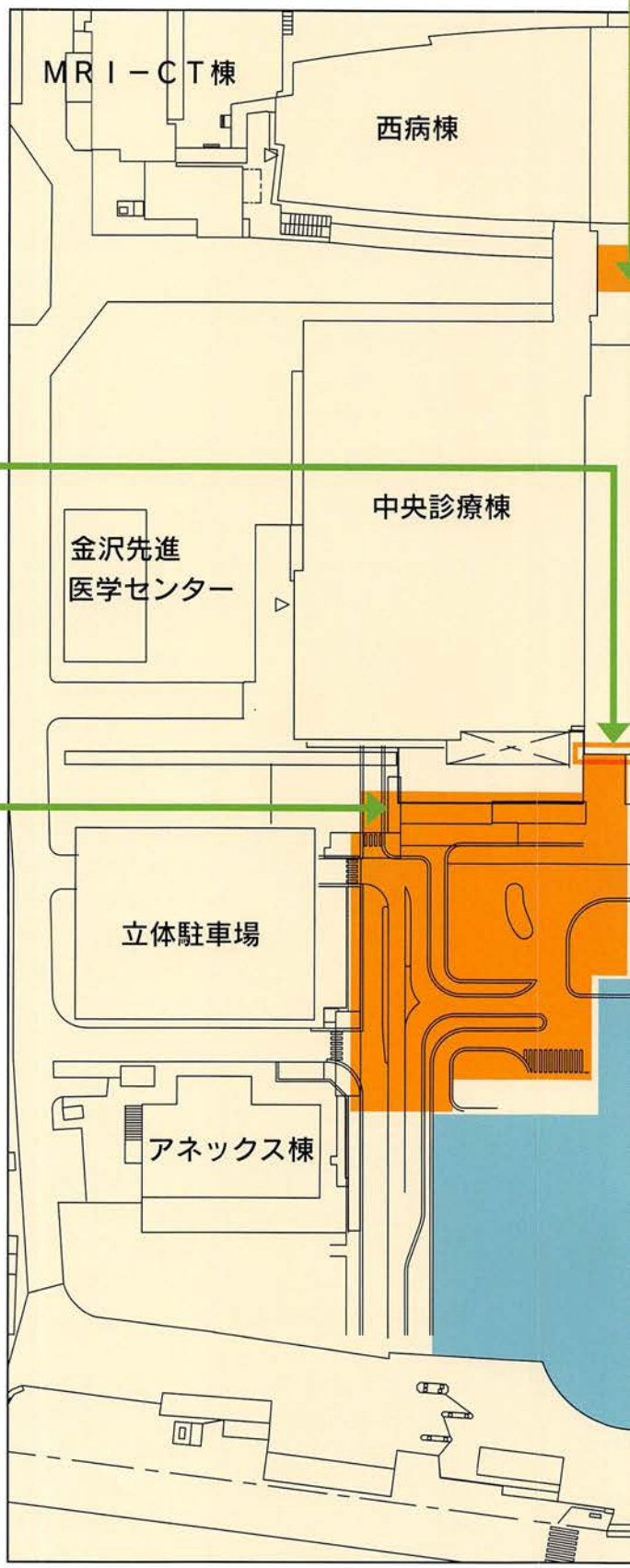
プロムナード正面ガラスのフィルム張替え

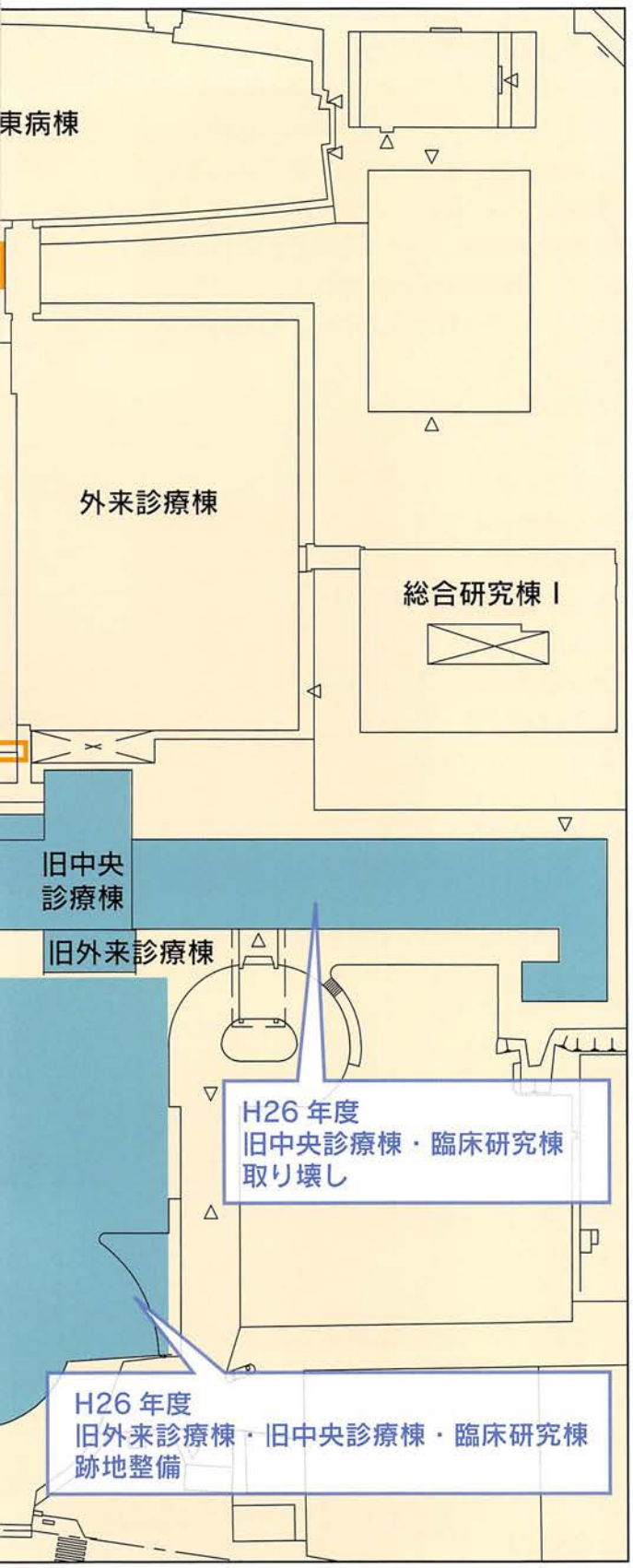
平成21年新外来診療棟が開院する前、工事の目隠しを目的としてプロムナード正面ガラスにフィルムを設置しました。設置から4年が経ちフィルムの劣化が目立ったため、今年度新しく張替えを行うこととなりました。新しいデザインに関しては執行部会議メンバーでアイディアを出し合い今回のデザインに決まりました。平成25年7月に新しく張り替えました。

病院入口及びロータリーを整備

屋外環境整備の一環として、病院入口及びロータリーを整備し平成25年4月より西側のロータリーを一部開放しました。これにより、より病院入口近くで乗降りが可能となりました。また、雨や雪を凌げるよう歩道にキャノピーを設置しました。

現在も病院整備中により皆様にはご不便とご迷惑をおかけいたしますが、ご理解とご協力のほど、よろしくお願いいたします。





※ 今後の工事予定は変更となる場合もあります。

大学病院の中庭に「宝の島」誕生！

「一日も早く治りたいと願う患者さまを勇気づけ、なんとか病気を治したいと闘う医療者を元気づけ、ほっと癒してくれるような風景がつくれないものか」、というリクエストが今年の春先に富田勝郎病院長から金沢美大の「ホスピタリティアート・プロジェクト」（もてなしのアートと医療の共同企画）にありました。これを受け、美大の鍔隆弘教授が指導するデザイン科の学生から提案されたスケッチをもとに、病院長をはじめとする関係スタッフとのあいだでうまれたのが、この「宝の島」です。

西洋医学の父であるヒポクラテスが生まれた地中海の小島「コス」に育つ、オリーヴの樹と青い海原をイメージしました。島のかたちは、日本古来の装飾「勾玉」（まがたま）からとりました。病院という閉じられた空間のなかで、とかく重く低くなりがちなこころの視界に広がりと明るさをもたらす癒しのモニュメントです。この「宝の島」が、かけがえのない命と健康の象徴として、患者さまと医療者のこころをつなぐ「宝」として育まれてゆくことを、スタッフ一同期待しております。

（金沢美術工芸大学教授　横川　善正）

中庭モニュメントオープニングセレモニーの様子（平成25年8月30日）

ご挨拶

センター長　太田 哲生

この度、金大病院CPDセンター長を拝命しました消化器・乳腺・移植再生外科の太田哲生です。センター長就任にあたり、一言ご挨拶を申し上げます。

この金大病院CPDセンター構想は、地域医療再生計画に基づいた事業の一環として、平成21年度にスタートしたものであります。すなわち、能登北部医療圏の医師および看護師の確保、南加賀医療圏の救急医療体制の確保・充実を目的に、石川県と金沢大学、そして石川県地域医療支援センターが三位一体となって立ち上げた目玉事業でありました。そして、4年の月日をかけて建設され、本年4月27日(土)に晴れて竣工式を執り行うことができました。ここに、これまで多大なご支援とご協力を賜りました石川県知事の谷本様をはじめ、関係各位に心からの感謝と御礼を申し上げます。

金沢大学附属病院は、長年にわたり石川県のみならず、北陸3県の中核・拠点病院として、多くの医師を地方の病院に派遣し地域医療の支援にあたって参りました。これからも、能登北部ならびに南加賀をはじめとする地域医療の支援に、この金大病院CPDセンターを大いに利活用していただきたいと思います。また、“患者中心の医療”が求められている昨今、安全・安心で質の高い医療を患者に提供していくには、より良い“チーム医療”の実践が不可欠であります。そのためにも、医師のみならず、看護師や薬剤師等のスタッフの方々にもスキルアップや専門能力の向上のため、大いに利活用していただきたいと考えております。そして、この建物に“魂”をいれていただき、名実ともに金大病院CPDセンターを石川県のみならず、北陸の地域医療を支える拠点にしていただければ幸いです。

何卒、よろしくお願い申し上げます。

利用の様子

シミュレーター使用方法説明会

金大病院CPDセンターに入ったシミュレーター機器の説明会を7月初めに5日間開催し、本院の医師、研修医等125名の参加がありました。センターでは高度な技術を習得した専門医の育成のため、最先端のバーチャルシミュレーターによる高度医療のトレーニングができる機器を備えています。今回の説明会では、センター内で利用可能な5つの機器（バーチャルリアリティ内視鏡手術トレーニングシミュレーター、腹腔鏡下手術トレーニング用シミュレーター、ダヴィンチトレーナー、血管インターベンションシミュレーショントレーナー、バーチャルリアリティ気管支・消化器内視鏡シミュレーター）の説明を受けながら実際に機器の操作を体験しました。説明会に出席した医師からは、「実物にかなり近く勉強になります。」「手技の習得に役立ちそうです。」といった声が多数聞かれました。

金大病院 CPD センター完成記念行事を挙行

金大病院CPDセンターの完成を記念して、平成25年4月27日、記念式典を挙行し、記念シンポジウムと祝賀会を開催しました。

記念式典では、富田病院長が「遠隔地の医師が地域医療に専念できるようセンターを活用してほしい」と式辞を述べ、続いて、中村信一学長、谷本正憲知事、山野之義金沢市長、近藤邦夫石川県医師会長による祝辞が披露された後、来賓並びに病院関係者によるくす玉開披が行われました。

記念式典に引き続き、当センターと珠洲市民病院をテレビ会議システムで結び、「石川の地域医療を考える」をテーマに、記念シンポジウムが行われました。

また、祝賀会では富田病院長、飛田秀一金沢大学病院医療支援機構理事長の挨拶に続き、来賓、病院関係者による鏡開きが行われ、記念行事は盛況のうちに終了しました。

初めて金大病院CPDセンターを利用して

平成25年 4 月27日(土)にオープンしたばかりの金大病院CPDセンターで、5 月30日(木)に看護部研修会「英国ホスピス視察報告及び医療安全のための製品技術開発報告」を行いました。広い会場内には左右数ヶ所にフルハイビジョンＴＶモニターが設置され、200名を超える参加者全員が正面スクリーン同様の美しい画像と、良い音響の素晴らしい環境で受講することが出来ました。最新設備の整った会場で効果的に受講ができ、満足したという感想が多数ありました。

東日本大震災の際の金沢大学病院の災害医療活動に対する感謝状を受け取って

救命センター長　稲葉　英夫

平成25年5月10日に厚生労働省から東日本大震災に際し災害医療支援活動を行った金沢大学病院に対し感謝状の授与が行われた。発災から2年以上経過した時点の感謝状授与であったが、あらためて発災後の医療活動を振り返る機会を与えてくれた。東日本大震災は未曽有の災害であり、津波の威力は想定外であったかもしれない。情報不足、道路の寸断から、発災直後のDMATの活動は、DMAT隊員にとっても不満足なものであった。第1DMAT隊の活動は、情報収集と限られた医療機関への支援活動にとどまった。第2DMAT隊が現地に向かった時期には被災の全貌が明らかになり、第2DMAT隊は広域患者搬送を始め、活発な活動を行った。さらに、その後、数か月以上続いた宮城県に対する医療支援活動では、石巻市を中心とした医療支援に金沢大学医療班は中心的役割を果たした。このような国や県を通じての医療支援に加え、専門領域の診療支援のニーズが高まった後期（発災1～2か月後）には、各診療科の多くの医師・看護師・薬剤師・技師が所属学会や国立大学病院長会議を通じての医療支援に加わった。この感謝状は、決してDMAT隊員のみに贈られたものではなく、様々な医療支援に関わったすべての金沢大学病院職員に対して送られたものである。

災害はいつ再び日本に発生するかは分からない。東日本大震災の教訓が生かされ、“想定外”という言葉が再度使われないような災害対応ができることを望んでいる。

感謝状

国立大学法人 金沢大学附属病院殿

貴団体は 東日本大震災により
甚大な被害を受けた被災者に
対し惜しみない支援に努められ
その功績は多大であり他の
模範とするところであります
よってここに感謝の意を表します

平成二十五年五月十一日

厚生労働大臣　田村憲久

日本骨髄バンクより感謝状

この度骨髄移植推進財団（骨髄バンク）より金沢大学附属病院に感謝状（写真1）が届きました。骨髄移植は、白血病など血液難病を治すため、健康なドナーの骨髄を移植する治療法です。骨髄移植に加え、末梢血幹細胞移植、さい帯血移植を総称して「造血幹細胞移植」と言います。金沢大学附属病院の造血幹細胞移植の歴史は長く、累計件数は500を超えます。患者さんの兄弟姉妹などご家族に適切なドナーがいない場合、骨髄バンク登録者からボランティアドナーを募り、骨髄を提供していただくことがあります（写真2）。金沢大学附属病院は従前より、骨髄バンクの依頼に応じ、ボランティアドナーからの骨髄採取も積極的に行ってきました。今回の感謝状はこれを受けたものです。安全性が十分担保されているとは言え、数回の受診や約4日間の入院、全身麻酔など、骨髄の提供には時間や労力を要します。ご家族や職場など周囲の理解も必要です。見ず知らずの血液難病患者さんを救うために骨髄提供を決断された骨髄バンクドナーこそ、真の「ヒーロー」です。私たちは、そういった骨髄ドナーの尊い精神と行動に応え、一人でも多くの患者さんを救うために今後も努力を続ける所存です。

感謝状

金沢大学附属病院殿

貴病院は骨髄バンク事業に深い理解を
示され非血縁者間骨髄採取施設として
血液難病の患者さんの救命のために
数多くの非血縁ドナーの骨髄採取を
お引き受けくださり本事業の進展に
貢献されました
その功績に対しここに深く感謝の意を
表します

平成二十五年八月一日

公益財団法人骨髄移植推進財団
理事長　齋藤英彦

（写真1）

（写真2）

夜間保育室（きらきらぼし）完成

金沢大学附属病院では、職員が安心して働くための職場環境整備及び仕事と育児の両立支援を推進するため、平成24年12月28日に「夜間保育室」（愛称：きらきらぼし）を設置しました。

病院敷地内には社会福祉法人すぎなの会が運営する「つくしんぼ保育園」があり、平成20年9月からは、子どもが病気で登園、登校ができない場合に保護者に代わって看護・保育する施設として病児保育施設「たんぽぽルーム」が病棟内にあります。

さらに今回、夜間保育室を設置することにより、医師や看護師等の夜間勤務に対する育児支援が充実し、職場環境が一層整備されました。

夜間保育室「きらきらぼし」を利用して

北病棟1階　畠　稔

私と妻は看護師であり1歳半になる息子と3人家族です。夜勤や休日勤務を互いに調整しながら子育て中です。「きらきらぼし」を利用し、仕事と育児の両立がよりスムーズになりました。「きらきらぼし」では息子は家庭にいる時と同様によく遊んでぐっすり眠り、利用料も500円と安価で安心して預けられます。当院職員の就学前児童が利用対象ですので、たくさんの職員が利用するようになったら良いと思います。

ボランティア活動員との情報交換会を開催

本院において有意義なボランティア活動をしていただくため、平成25年3月13日（水）に、ボランティア活動員と本院関係者等との情報交換会が行われました。

会食しながらの和やかな雰囲気の中、ボランティア活動員から、活動を通じての感想や、ボランティア活動をする上での病院に対する要望、実際に患者さんと接しているからこそ見えてくる貴重なご意見をいただきました。

- 都合のよい時間だけでよいので、活動しやすい。
- ボランティアをしたくても、方法が分からない人も多い。
- 研修を受けたいが、長時間だと参加できないため、考慮してほしい。
- 工事中で、色々と通路が変わるため、変更があったら知らせてほしい。
- 患者用の駐車場を増やしてほしい。

病院長から、ボランティア活動員のご意見をふまえ、できることから改善し、更にボランティア活動を活発にしていきたい旨の発言がありました。また、村上外来看護師長から、外来患者さんからの需要が多いため、ボランティアの人数が増えると助かるという発言がありました。さらに、金沢ボランティアセンターの上田氏からは、ボランティア講座を開講しているので、本院用の講座も企画できれば、導入部分のオリエンテーションとして利用できるのでは、というご意見をいただきました。

最前線となって患者さんの対応をしてくださっているボランティア活動員のおかげで、患者さんが過ごしやすい環境を維持できていることを再認識した一日でした。

金沢大学附属病院では、ボランティア活動を希望される方を募集しています。

当院では、ボランティアの方々の暖かい手助けにより、患者さんが安心して診察を受けられる環境づくりができればと考えております。

ボランティア活動には、特別な資格を持たなくとも、患者さんのお役に立ちたいと思っている方、人と人とのふれあいを持ちたいと思う方であれば、どなたでも参加することができます。

皆様方のご協力をお願いいたします。

お問い合わせ先
〒920-8641　金沢市宝町13番1号
金沢大学附属病院　医事課医療福祉係
TEL：076-265-2000（内線 7483）
FAX：076-234-4330

膵がん教室を開催しました

専門看護外来　福間　明美

多くのがん患者さんは癌と診断されたときや治療を受けるとき、様々な不安や苦痛を抱えながら過ごしているため、その対処方法を知ることでQOLを高め、その人らしく過ごすことが出来ます。膵がん教室は、対処法に関する知識や情報を得て、相談できる人や場をつくることを目的に開催しました。

昨年度は第1回目（平成24年11月6日～12月4日の5回シリーズ）と第2回目（1月16日～2月27日の6回シリーズ）を開催しました。内容は外科医師が膵がん教室について、内科医師が治療と予後、精神科医師が治療中の不安について、麻酔科医師は痛み、放射線科医師は放射線治療、薬剤師は化学療法と副作用、栄養士は食事について、ソーシャルワーカーは生活と社会保障、看護師は在宅療養についての説明をしました。毎回10人前後の患者さんが参加され「なかなか前向きになれない」「食事が難しい」などの困っていることから意見交換が始まり、普段の診察では相談出来なかった悩みについて話すことが出来ました。今年度も秋頃の企画を考えています。困っている方は地域医療連絡室（内線2040　8:30～17:00）にご連絡ください。

療養相談室　造血幹細胞移植後フォローアップ外来の紹介

東病棟6階　上畑　未紀

造血幹細胞移植後フォローアップ外来は、造血幹細胞移植後の患者さんやご家族を対象にした療養支援外来です。造血幹細胞移植は白血病や悪性リンパ腫など血液がんの治療のひとつで、副作用により退院後も生活に影響がみられることがあります。そのため移植後の患者さんが、自宅での生活や体調などの相談や定期的な体調チェックを、規程の研修を修了した看護師から受けられるように療養支援外来の開設が全国的に進められています。当院では昨年11月から週1回（曜日は毎週変わります）午前に開催していますので、外来受診時に医師と相談し、予約の手続きをお願いします。

療養支援外来の看護師は、患者さんやご家族が抱えている自宅での生活上の不安、職場復帰、または結婚や出産、さらには子どもの予防接種への対処法や、生活上の注意事項について支援しています。また特に造血幹細胞移植後においては半年後、1年後、2年後などの節目の体調チェックや、その後の長期的視点での管理が必要なので、節目受診が滞りなく受けられるよう整備も必要です。現在外来に通院されている患者さんは当院で移植を受けた方が多く、入院中の経験をもとに自宅で安心して生活が送れるよう患者さん個人にあった具体的な支援の提供を目指していきたいと思います。

日本看護学会で看護研究が優秀論文として表彰されました

MFICU　林　美希

「MFICU入室患者が同室患者の緊急入院や状態変化によって抱く思い」というテーマで第43回日本看護学会論文集（母性看護）に投稿した看護研究が、平成25年3月31日に公益社団法人日本看護協会日本看護学会より論文508編中優秀論文3編の1つとして表彰されました。

この研究は、県内からの重症な妊婦さんの24時間緊急入院を受入れているMFICU（母体胎児集中治療室）としての環境の中で、少しでも妊婦さんが安心して入院生活を送ってほしいと取り組んだ研究です。その結果、MFICUに入院している妊婦さんが恐怖心や不安というマイナスの感情だけでなく、大学病院にいることでの安心感や同室の妊婦さんがいることが支えになるというプラスの感情も感じていたことが明らかになりました。研究を通して妊婦さんの思いに寄り添いながら、看護していく大切さを改めて感じました。これからも、MFICUに入院している妊婦さんに対し、医療機器の音や看護師の話し声なども療養環境の一部として捉え、恐怖心や不安が和らぐよう声をかけるなどのケアの工夫をし、妊婦さん同士が交流をもてるような支援を心掛けていきたいと思います。

海外のホスピスを視察して

その1 ドイツ　西病棟3階　千代 恵子

平成24年9月15日（土）～9月23日（日）、ドイツ「クリストファロス・ハウス」、「聖ヨハネス・ホスピス緩和ケア施設」の視察研修に参加しました。それぞれの施設は、フラワーアレンジメントが訪問者を迎えていたり、大きな窓のある個室で要望を取り入れた食事が準備されていたりと、家庭的な温かさに溢れ、穏やかな日常生活が得られるように心配りされていました。

自宅での療養期から「一人にせず、その人の傍にいる」ことを大切にする意識が伺え、当院でも、穏やかで心の休まる入院環境と、来院された皆様に心のこもったケアを提供し「この病院を選んで良かった」と思って頂けるよう日々努力していきたいと思います。

その2 イギリス　西病棟8階　山上 和美

平成25年3月18日（月）～25日（月）、英国「ドロシーハウス」「セントジョセフ・ホスピス」の視察研修に参加しました。英国のホスピスは活気がありいつでも誰でも自由に立ち寄れる場所として、“自分の家”のような場所でした。ボランティアがホスピスを支えており、サービスとは「人に好ましいものを提供する、人に尊厳を与える、その人を人として認めることが出発点で“愛の原点”である」という精神性がとても感じられました。

「命」や「生きること」「死をどう迎えるか」という繊細な話は、苦手な気持ちを抱くかもしれませんが、大切な時に、患者さん・ご家族と一緒に考え心にいつまでも残る宝物をたくさんお届けしたいと思います。

自部署に医療安全ツール「チーム STEPPS」を導入して

西病棟2階　山崎 真由美

医療の現場では、患者さんの状態変化、治療過程での予想外の展開、医療者の様々な状況など「想定外の出来事」であふれています。患者さんの安全を高めるための手法として世界標準の患者安全推進ツール「チームSTEPPS」が米国で開発されました。医療ケアの質、患者さんの安全性、効率をもとめて開発されたこのツールを学ぶために、平成24年5月2日（水）～5月12日（土）に米国ワシントンDCのプロビデンス病院で私は研修を受講する機会をいただきました。

現在、私たち看護師は「チームSTEPPS」を参考に、安全な医療を提供するために医療メンバーが自分自身の体調を確認するための6項目の頭文字をとったツール“I' m safe”チェックリストを使用し、毎日自分たちの体調確認を行い、安全な看護サービスを提供するようにしています。

また一部署の取り組みとして、患者さんの状況報告の際や緊急の情報を伝達するために効果的な4項目（S-何についての報告なのか、B-基礎的な情報の提供、A-報告者のアセスメント、R-報告者の提案）の頭文字をとったツール“SBAR”を活用し、報告内容をはっきりさせることで、医師をはじめとする医療メンバー間のコミュニケーションがよりスムーズになりました。今後は処置や検査前に部位や内容について全員が手を止めて再確認する方法である“ハンドオフ”の導入について、職員交代や他部署との連携の際に活用できるよう検討中です。

摂食・嚥下障害看護認定看護師の誕生

摂食・嚥下障害看護認定看護師　染澤　直美

2012年6月24日、日本看護協会の認定審査に合格し、摂食・嚥下障害看護認定看護師になりました。人間にとって「食べる」ことは生きていくために必要なことであり、また楽しみでもあります。しかし病気や治療のために「食べる」ことが障害されたり、また加齢による影響から「食べる」ことに不都合が生じてしまう方がいらっしゃいます。認定看護師として一人でも多くの患者さんの「食べる」ことを支えたいと思い、「食べる」ことが障害されてしまった場合のリハビリとして首のマッサージや、口・舌・のどの運動、食べ方の練習、食べやすい食事の選択などの活動をしています。また、うまく「食べる」ことができず肺炎になってしまう患者さんには、食べ方の支援をしています。肺炎予防のためには、口腔ケアを行って口の中をきれいにしておく必要があり、口腔ケアはとても重要と言われています。現在私は病棟で誰もが安全に・美味しく「食べる」ことができるように、口腔ケアに重点を置いた支援を中心に活動しています。

平成25年度ふれあい看護体験

1990年旧厚生省により5月12日が「看護の日」として制定されました。そしてこの看護の日を含む1週間を「看護週間」とし、全国で様々な事業が展開されています。当院でも5月14日（火）にふれあい看護体験が開催されました。「看護の日」の制定は、21世紀の高齢者社会を支えていくためには看護の心、ケアの心、助け合いの心を私たち一人一人が分かち合うことが必要であり、こうした心をだれもが育むきっかけとなるように、看護の普及に尽力したナイチンゲールの誕生日にちなんでいます。

ふれあい看護体験には、小松と金沢、能登から7名（高校生5名・中学生1名・一般1名）を受入れました。白衣に着替え参加者は病院長より「一日看護師」の辞令をうけ、緊張と期待を胸に部署へ向かいました。参加者は病棟で血圧測定やシーツ交換、手浴や足浴を看護師と一緒に行いました。患者さんから「さっぱりしました、ありがとう」と声をかけられ、笑顔になりました。また新生児の心音を聴診器で聞いた後、自分の脈と比べて早いのにびっくりし、命のすばらしさを実感できたと感想を話していました。

午後からはふれあい看護体験に合わせ当院職員手作りの「ふれあいコンサート」を開催しました。会場に来られた患者さんやご家族、一日看護師7名も良い時間を過ごすことができたと喜んで頂きました。

Kindai Hospital Today vol.16

編集・発行　金沢大学附属病院　病院広報誌編集委員会（事務担当：総務課　調査・広報係）
TEL 076-265-2936　FAX 076-234-4320　皆さまからのおたより、ご意見をお待ちしております